

代表者 3A 湯瀬 綾太
指導者 長里 加奈子

はじめに

私たちの高校のある十和田地区をはじめとする鹿角地域は、教育を重んじる城下町として発展してきたところである。学校のすぐ近くには、美しい生け垣の武家屋敷の通りも存在し、少し歩けばそうした雰囲気を実際に感じることも出来る環境でもある。

そのような地域で高校生活を送っている私たちであるが、実際にはこの地の先人たちの業績を正しく知っているとはいえない。

今回は、私たちのふるさと鹿角の先人の生き方や業績を知り、それをまとめることによって、自分たちの地域、また、そこに生活する私たち自身の生き方を考える機会としたい。

I テーマ設定の理由

鹿角の現在、これからを考えるためにも、これまでどのような人が地域の発展を支えてきたのか、文化を築いてきた先人たちはどのような人々であったかを研究しようと考えた。鹿角の先人、偉人について学び、パンフレット形式で、私たち高校生の視点からみた先人の功績を発信することで、ふるさと鹿角に誇りを持ち、次は私たち自身が鹿角を発展させていくのだという自覚を新たにしたいと考え、このテーマを設定した。

II 実施計画

- ① 5月16日 オリエンテーション
- ② 5月30日 鹿角の先人に関する資料を探そう…学校図書館、十和田図書館
- ③ 6月6日 鹿角の先人に関する資料を探そう…鹿角市先人顕彰館見学
- ④ 6月20日 パンフレットに内容についての検討会① 担当グループの決定
- ⑤ 8月22日 パンフレットの形式についての検討会②
- ⑥ 9月26日⑦ 10月10日⑧ 10月24日
資料収集、パンフレットの下書き作成
夏休みからここまでの期間に インターネット、図書館、鹿角先人顕彰館で各自研究
- ⑨ 11月21日 ⑩ 11月28日 下書き
- ⑪ 12月12日 パンフレット作成

- ⑫ 12月18日 パンフレット、発表準備
- ⑬ 12月19日 発表会準備、リハーサル
- ⑭ 12月20日 公開研究発表会

III 調査・研究内容

資料を集め、研究、検討した結果、下記の四つのグループにわかれて、高校生ならではの内容を盛り込んだパンフレットの作成を目標として取り組むことになった。

〈テーマと担当グループ〉

	テーマ	担当者
1	瀬川清子	2A 澤口由佳・成田舞衣
2	内藤湖南	2A 加賀 翔輝 2B 青山佳・阿部佑希也・大村龍之介・小田島雄大
3	和井内貞行	3B 熊谷友花・齋藤幸香
4	内藤湖南 児玉高慶 立山林平	3A 榎並将太郎・黒沢能伸 高橋諒・湯瀬 綾太

1 瀬川清子：女性民俗学の大家



明治28年毛馬内生まれ。明治43年に母校毛馬内小学の教員となる。大正11年に「女も大学に入れる」という新聞広告を読み、大学入学を決意し、夫、姑とともに上京し、東洋大学に

入学した。大学卒業後は私立川村学園、東京市立一中に教員として勤務した。

そのかわら、民俗学者・柳田国男に師事し、民俗学の研究を続けた。北は北海道から南は沖縄まで、40年以上にわたって調査し、女性民俗学の発展に尽くした。昭和35年より大妻女子大学教授。昭和55年アメリカエイボン女性教育賞受賞。翌年柳田国男賞受賞。



【↑エイボン賞の展示】【採集手帖】

瀬川清子直筆の採集手帖が先人顕彰館に保存されている。採集手帖とは、柳田国男の「同時同洋洋式の一斉調査が有効」との考えに基づき作成された、いわゆるフィールドノートである。瀬川清子の採集手帖は24冊あり、どのノートにもびっしりと記録されていた。師である柳田国男でさえ男性であるために人々から聞き取りづらかったような、女性ならではの調査内容とされている。保存されている著書を手にとってみると、完成した本にもさらに自分で手直しのコメントのメモを挟んでいる物もあった。【下写真】



2 内藤湖南：ジャーナリストから東洋史学者へ



1886年（慶応2年）毛馬内生まれ。内藤虎次郎。父である南部藩士・内藤調一（内藤十湾）から中国の古典を学ぶ。新聞記者・雑誌記者として活躍、中国問題の専門家として認められるようになる。大阪朝日新聞社では論説を担当した。

教育者・研究者としても活躍し、京都大学で東洋史を担当した。湖南は東洋史学研究の第一人者として今なお高く評価されていて、昭和6年には昭和天皇に御進講（お教え）し、昭和9年に亡くなった際には、勲二等瑞宝章を送られた。鹿角先人顕彰館でこの宝章も実際に見ることが出来る。

【↓勲二等瑞宝章】【書や漢詩も残されている】



3 和井内貞行：十和田湖でのヒメマスの養殖に成功。

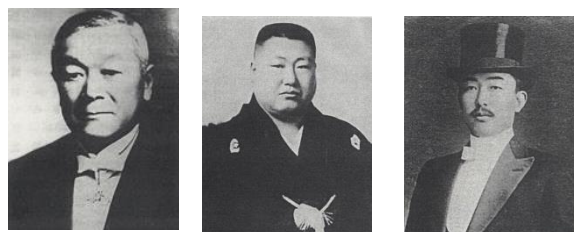


1858年（安政5年）毛馬内生まれ。明治7年（1874年）毛馬内学校（現十和田小）の助教員となる。明治14年（1884年）十和田湖での養殖を決心し、鯉の稚魚600尾を放流する。その後、鱒の養殖に切り替えてヒメ

マス（カパチェッポ）の養殖に挑戦、明治38年にはヒメマスの回帰が確認され、とうとう養殖事業が成功する。22年もの苦難の末、養殖事業を成功させた。この頃、飢饉に苦しむ湖畔の住民を救うため、漁獲のすべて救済にあてたこともあった。

ヒメマス養殖事業のほか十和田湖観光の基礎を築いた人物でもある。

4 内藤湖南・児玉高慶・立山林平



ジャーナリスト、東洋史学者として活躍した内藤湖南、武道を奨励して青少年をしどろした児玉高慶、天才数学者と言われた立山林平、それぞれ分野で鹿角の偉人を一つのパンフレットで紹介した。

児玉高慶は明治21年柴平生まれ、私財を投じて道場を経営し、立山林平は毛馬内に生まれ小学校から東京大学卒業まで常に首席を占め、31才の若さでなくなってしまうまで、学者として将来を囑望されていた人物である。

IV おわりに

鹿角市先人顕彰館などでは、鹿角の偉人についてすでにある程度研究され、まとめられている。すでに知られていることを学習しなおすと同時に、私たち高校生からみた姿を研究し、中高生にも出来るだけ理解しやすいようなパンフレットにまとめるよう努力したが、この研究を通して、地まだまだ、私たちの知らない先人の活躍があることがわかった。まだまだ研究する余地があったが、まずは、豊かな文化や学問がはぐくまれてきた地域であることに誇りを持ちたいと思う。最後に私たちの研究に協力して下さった鹿角市立十和田図書館、鹿角市先人顕彰館のみなさまに感謝します。

主な参考文献…

- ・鹿角先人顕彰集成—新しい文化を築いた人たち
：『鹿角先人顕彰集成』刊行委員会
- ・瀬川清子『日本の民族2日本人の衣食住』河出書房新社
- ・瀬川清子『沖縄の婚姻』岩崎美術社
- ・『内藤湖南全集』筑摩書房

他